

向、俗いよいよ奢淫にして、趙・衛の風俗賤より起りて礼制を踰ゆるを睹る。向おもへらく、王教は内より外に及び、近きものより始まると。故に詩・書に載するところの賢妃貞婦の、国を興し家を頌はして法則とすべきもの、及び靡弊の乱亡せしものを採取し、序次して列女伝を爲る、凡そ八篇、以て天子を戒む。

後宮において礼制を踰えて目に余るふるまいがあったのは、衛嬖好と趙飛燕姉妹であるが、殊に趙飛燕姉妹の奢侈贅沢、驕慢嫉妬のほどは常軌を逸しており、その狂乱のさまは趙飛燕姉妹伝(本書七二頁)に克明に描写されている。

前漢時代もこの頃は創成期から百八十年ほどを経て、文化の爛熟期にあり、権門貴族たちは、「奢侈で荒淫で、天子と女樂を争っていた」(『漢書』礼樂志)といい、この時代の淫靡な風潮と、天子の放恣な性格とが両々相俟って官廷の「奢淫」を増幅していったのである。

劉向はこのような後宮の乱れに漢室滅亡の危機を感じ取り、古書の中から手本や鑑戒とすべき女性の伝記を集めて『列女伝』を制作し、天子を戒めたのである。漢室の安泰にとっては、後宮の婦道の確立と礼節の回復とは焦眉の急であった。

劉向の提示する礼節とは、もちろん、当時の帝室や支配階級がその社会を維持するための絶対的な道徳規範であるが、『列女伝』の女性たちは、この礼節を守ることにかけてはまことに果敢で、時には命をなげうち、母子、夫婦の情愛を断ち切つてまでも、礼節に拘泥する。そのさまは、壮絶であり、宋・王安石が「劉向は狂女を述べて書を成した」(王回「古列女伝序」に引くことば)と譏るほどこの女性たちは狷介である。ここで、劉向の、漢室滅亡に対する切迫した危機感がにじみ出ていると読み取ることができよう。

厳格な婦道の確立こそ、『列女伝』制作の目的であり、「吾にして言はずばまに誰か言ふべきものぞ」という、漢室の長老としての強い自覚が、この書物を生み出す原動力となったのである。

『列女伝』の成立は、成帝の末年、劉向六十四歳のころと推定される。

## (三) 『列女伝』の体裁

劉向の編纂した『列女伝』は、『漢書』劉向伝によると全部で八巻であったというが、これがそのまま伝えられているわけではない。現在の書は、劉向以後、他人の手が加わって、六朝時代ころには一五巻に増えていたものを北宋・王回(一〇二四—一〇六五年)が整理したもので、本来の劉向編纂部分を「古列女伝」七巻とし、後の増加部分を別に「続列女伝」一巻として付し、合わせて八巻にまとめ直したテキストである。

『列女伝』は中国古代女性の伝記集で、その首行や事績の内容によつて、母儀伝、賢明伝、仁智伝、貞順伝、節義伝、弁通伝、孽嬰(寵妾)伝の七巻に分けられ、各巻二五人ずつである(ただし母儀は一伝を欠く)。各伝の末尾には、「君子曰」「君子謂」の形式で編者劉向の短い論評があり、論評の結びは、「詩曰」「詩云」の形式で『詩経』の詩句を引用して論断の根拠としている。そして最後に「頌」を付して一つの伝記を終える体裁である。以下、これらの形式について少しく解説しておく。

君子曰の形式 君子という第三者を借りた劉向自身の論評である。この形式はすでに『春秋左氏伝』に見え、これは唐・劉知幾が論じているように(『史通』卷四論贊)、後世の歴史書における論贊の先駆をなすものである。

詩句の引用 『詩経』や『書経』など、主に経書の句を引用して一篇の結びとする形式は、漢代の著作に多く見られるところであるが、この形式はやはり『春秋左氏伝』に見え、特に『詩経』の引用が多い。『列女伝』もわずかの例外を除いて(例えば「京師節女」は『論語』を引く一五二頁)すべて『詩経』の詩句をもって論評を結ぶ。

三家詩 ただ、注意しなければならないのは、当時、劉向が用いた『詩経』のテキストは、現存するものとは異なっているという点である。前漢時代、『詩経』の学問には、魯人申培の伝えた「魯詩」学派、齊人轅固生の伝えた「齊詩」学派、燕人韓嬰の伝えた「韓詩」学派の三学派があつて、それぞれ異なったテキストを用いていた。これを「三家詩」といい、劉向が学んだのは「魯詩」である。しかし、三家詩はつとに亡佚して伝わらず、劉向が『列女伝』等に引